

コーパスに基づく日本語擬態語動詞の意味分析

菅原 崇 (岐阜工業高等専門学校)、
浜野 祥子 (ジョージワシントン大学)

A Semantic Study on Japanese Mimetic Verbs based on Corpus Data

Takashi Sugahara (Gifu National College of Technology),
Shoko Hamano (George Washington University)

1. はじめに

日本語のオノマトペ (特に擬態語、擬情語) は「する」「つく」「めく」などの接辞を伴い動詞化する。

その中で「する」は最も生産的な接辞で、Takehi, Tamori, and Schourup (1996)においておよそ 300 語のオノマトペが「する」を伴う動詞形を持つとされている。その中でも 2 モーラ反復形のオノマトペに「する」が伴う形 (e.g. ぶらぶらする、ざらざらする) は優勢で、Takehi, Tamori, and Schourup (1996)にはおよそ 170 語が収録されている (本研究ではこれを「する」動詞と呼ぶ)。

2 番目に生産的な動詞化は 2 モーラ非反復形のオノマトペに接辞「つく」を伴う形 (e.g. ぶらつく、ざらつく) であるが、「する」動詞ほど数は多くなく Takehi, Tamori, and Schourup (1996)には 24 語が収録されている (以下「つく」動詞と呼ぶ)。

一見すると、「つく」動詞は「する」動詞と同じ意味を表しているかのように思われる。

- (1) a. 私が近所をぶらぶらする。
b. 私が近所をぶらつく。
c. 床がざらざらする。
d. 床がざらつく。

田守・スコウラップ(1999)は「つく」動詞は対応する「する」動詞を持つこと、「つく」動詞は否定的な意味を伝えるものであるとしている (ibid: 56-57)。

しかしながら、「つく」動詞すべてが否定的な意味を持つわけではない (e.g. 雪がちらつく)。さらに、否定的な意味を持つ「する」動詞が必ず対応する「つく」動詞を持つわけではない (びちゃびちゃする、*びちゃつく)。これらのことは、「つく」動詞が「する」動詞とは異なる意味的特徴を持つ可能性を示唆している。

本研究は、コーパスデータをもとに「する」動詞と「つく」動詞の意味的な違いを明らかにする。

2. データ

Takehi, Tamori, and Schourup (1996) 収録の 24 の「つく」動詞のうち 23 語が対応する「する」動詞を持つ (例外は「ばらつく」)。本研究はデータとしてこれら 23 の「する」「つく」動詞ペアの現代日本語書き言葉均衡コーパス (少納言) における用例 (「つく」動詞 2098 トークン、「する」動詞 2192 トークン) を用いる。

具体的な調査方法は、これら用例を主語が Agent、Experiencer、Theme のどれに属しているのかで大まかに分類したのち、より細かく「する」動詞を好む主語、「つく」動詞を好む主語を特定する形を取る。

3. Theme を主語に取る動詞

Theme として「する」「つく」動詞の主語になっている名詞の中で、「つく」動詞より「す

る」動詞と好んで共起するものがある。それが表1にまとめたものである。

表1 「する」を好む Theme と擬態語の組み合わせ

Theme と擬態語との組み合わせ		「する」と「つく」の頻度
Theme	擬態語	
液体	ねば(ねば)	19 : 2
食べ物		10 : 1
その他の集合名詞 (「くっずみ」「膜」など)		6 : 1
その他の名詞 (「口の中」など)		13 : 3
目	ごろ(ごろ)	9 : 0
石や岩		31 : 2
人や生物 (死体も含む)		20 : 0
その他散らばっているもの (「話」「企業」など)		27 : 0
各種不安定なもの (「窓」「ドア」「椅子」など)	がた(がた)	15 : 7
光沢のあるもの (「ガラス」「電灯」など)	ぎら(ぎら)	27 : 8
各種垂れ下がっているもの (「足」「ケーブル」など)	ぶら(ぶら)	16 : 0
人(単数、複数どちらの場合もあり)	ごた(ごた)	22 : 1
場所		14 : 1
抽象物		11 : 0
各種混乱しているもの (「店」「仕事」など)	ばた(ばた)	15 : 2

表中の Theme と擬態語の組み合わせは恒常的ないしは継続的な状態を表している。例えば、「液体」と擬態語「ねば(ねば)」の組み合わせは、液体が本来持つ粘り気を表すし、食べ物(e.g. 納豆)の場合はその食べ物が本来持つ粘り気を表す。

- (2) a. 唾液はねばねばして、いやな味がする。
 b. [金のつぶ納豆は] 食べる前にビニールを取るのにネバネバしないからスゲえ～
 楽チンっ！

これら液体や食べ物の恒常的な粘り気を表す場合「する」が好まれることを表1の頻度は示している。

「目がごろ(ごろ)」はコンタクトレンズなどの異物が目の中に入った場合の不快感を表す際に用いられる。このような状態は異物を取り除くまで継続する。また「ごろ(ごろ)」は石や岩、人などが一つのところに散らばっている(継続的な)状態を表す。どちらの場合においても「する」が好まれている。

- (3) a. コンタクトするとごろごろしませんか？
 b. 砂浜はなく、岩がごろごろしますから。

「がた(がた)」「ぎら(ぎら)」「ぶら(ぶら)」「ごた(ごた)」「ばた(ばた)」の場合も同様に、主語となる名詞の継続的な状態を表している。

表1の場合とは逆に、「する」動詞より「つく」動詞と好んで共起する主語 (Theme) がある。それが Table 2 にまとめたものである。

表2 「つく」を好む Theme と擬態語の組み合わせ

Theme と擬態語との組み合わせ		「する」と「つく」の頻度
Theme	擬態語	
肌	かさ(かさ)	12 : 21
雨	ばら(ばら)	1 : 37
雪	ちら(ちら)	1 : 46
影 (「面影」「幻影」も含む)		0 : 21
姿		2 : 10
顔		1 : 7
身体部位 (「頭の中」「体中」「腹の底」「胸」など)	ざわ(ざわ)	2 : 9
場所		16 : 38
贅肉やそれが付いた身体部位	だぶ(だぶ)	3 : 15
金		0 : 12
商品としてのもの		0 : 14
各種余剰なもの (「ニット」「シルエット」など)	もた(もた)	5 : 18

表2にある擬態語のうち「かさ(かさ)」「ばら(ばら)」「ちら(ちら)」「ざわ(ざわ)」は、同じく表2にある Theme との組み合わせによって一時的な状態や瞬間的な動きを表している。例えば、「肌」と「かさ(かさ)」の組み合わせは体の表面の乾燥を表しているのも、そのような乾燥状態はボディクリームなどを塗れば改善する一時的なものである。

- (4) a. どこもかしこも乾燥し、ぼくらの身体も、肌がかさかさして白い粉をふき [...]。
b. シャワーで自分の肌に触れると、お？[肌が] かさついてない。

「雨」と「ばら(ばら)」の組み合わせは雨の降り始めのような短期間の状態や、すぐに止むような時雨などの一時的な状態を表す。「雪」と「ちら(ちら)」の組み合わせも同様である。

- (5) a. 朝は雨がパラパラして・・・とっても寒かった！！
b. 職場を出るときは、雨がばらついていたが、下町は晴れている。
c. 白いのがちらちらすると見るまに大雪になってしまった。
d. この日は、前日に雪がちらついたものの、朝から快晴となり [...]

なお、「影」「姿」「顔」を主語に取る場合の「ちら(ちら)」は（比喩的に）瞬間的な動き、すなわちそれらがよぎることを表す。

- (6) a. これらの事件の後には、バサエフ野戦司令官の影がちらついている。
b. 昨夜はダイナのナイトガウン姿が頭にちらついてほとんど眠れなかった。
c. 日高玲子の、端整な顔が、内海の目の前にちらついた。

「頭の中」「体中」「腹の底」「胸」などの身体部位と「ざわ(ざわ)」との組み合わせは、身体部位の違和感とそれに伴う不安や昂揚感などの感情を表すが、そのような感覚（またはそれに伴う感情）は長時間継続するようなものではなく、瞬間的ですぐになくなるものである。次に「場所」について、その内訳は「教室」「客席」「会議室」「場内」など通常はそれほど騒がしくないところであり、「ざわ(ざわ)」との組み合わせによって表される喧騒はすぐに収まることが予測される。

- (7) a. 心臓が徐々に鼓動を強くしてゆく。体中がざわつき、血が凍りついてゆく。
 b. 藤圭子の唄が流れはじめた。唄はいつまでも続き、舞台には誰もあらわれない。客席がざわつきはじめたとき、ピンスポットに照らされてベビードールを着た女が登場した。

「肌」と「かさ(かさ)」に見られた「ものの表面の状態」という特徴は、「だぶ(だぶ)」「もた(もた)」にも見られる。まず「贅肉」と「だぶ(だぶ)」との組み合わせは体の表面に余計なものが付着していることを表す。「金」や「商品」に関してはその比喩的表現といえる。

- (8) a. そのひみつは、おなかのだぶだぶした皮ふにあります。
 b. 太り過ぎの確かめ方はお腹の肉がだぶついているとか[...]。
 c. 郵政民営化で 250 兆円のお金をだぶつかせてどこに使うのかと質問したら[...]。
 d. 国内にだぶつく工業製品のはけ口と[...]。

同様に「もた(もた)」についても、衣類などが体の表面に余分にまとわりついている様子を表す。

ここまで見てきた「する」動詞と「つく」動詞の違いは、以下表 3 や表 4 にある Theme と擬態語との組み合わせを対比させることでより鮮明になる。

表 3 「する」を好む Theme と擬態語の組み合わせ (その 2)

Theme と擬態語との組み合わせ		「する」と「つく」の頻度
Theme	擬態語	
胃	むか(むか)	16 : 8
頭	ぐら(ぐら)	16 : 1
歯		16 : 10
頭	ふら(ふら)	26 : 8
食べ物	ばさ(ばさ)	25 : 15
抽象物 (「関係」など)	べた(べた)	12 : 0

表 4 「つく」を好む Theme と擬態語の組み合わせ (その 2)

Theme と擬態語との組み合わせ		「する」と「つく」の頻度
Theme	擬態語	
胸	むか(むか)	12 : 29
「自信」「信念」など	ぐら(ぐら)	2 : 32
「権威」「立場」など		1 : 14
体	ふら(ふら)	4 : 18
足		2 : 19
「足元」「足どり」		0 : 31

髪	ぱさ(ぱさ)	5:25
髪	べた(べた)	1:7
化粧品		5:25

「むか(むか)」は「胃」とも「胸」とも共起するが、「胃」との組み合わせの場合、内容物が食道に降りるまで続く比較的長い胃の不快感を表し、それは基本的には胃そのものの疾患による。一方、「胸」との組み合わせの場合は胸やけのように、胃の不快感よりも比較的短い時間で改善する状態を表す。さらに、胸やけの場合は基本的に胃酸の逆流によるものなので、健康な人間であれば食事の直後に横になるなどしなければ起きない一時的な症状である。ここから「胃」の場合「する」を好み、「胸」の場合「つく」を好むことは予想でき、実際、頻度がそれを証明している。

- (9) a. 胃が痛くて、ムカムカして、胃ガン検査を受けようかと思いました。
 b. レストランを出てしばらくすると、牧師は、急に胸がむかついて気分が悪いと言
 い出した。

「ぐら(ぐら)」も同様の対比が可能である。「頭」との組み合わせは薬を服用してもある程度の継続するめまいのような体の不調を表す。また、「歯」との組み合わせも同様で、抜くまで継続する歯の不安定さを表す。これらの場合「する」が好まれることを表3は示している。一方、「自信」「信念」「権威」「立場」など本来安定しているものの場合、一度不安定になってもすぐに回復することが予測される。表4が示すように、これらの場合「つく」が好まれている。

- (10) a. 疲労と、久方ぶりに口にしたアルコールの相乗効果で、頭がぐらぐらする。
 b. 私が働いていた歯医者にお子さんを連れてきて歯がぐらぐらするって言ってき
 ました。
 c. “KGBきってのエリート女性”という自信がぐらつくのをくのを、マーイヤ
 はどうすることもできなかった。
 d. 香取さんのような美人にお目にかかる、ぼくの信念もぐらつきますがね。

「ふら(ふら)」の場合、「頭」を主語に取る場合と、「体」「足」「足元」「足どり」を主語に取る場合に二分できる。前者の場合「ぐら(ぐら)」と同様の継続的なめまいを表し、「する」が好まれている。一方後者の場合、一旦不安定になったとしても、普通は体勢を立て直すことが予測される。これは一時的な状態であり、「つく」が好まれている。

- (11) a. 皆が一斉に証言する「変なお香」の効果か、頭がふらふらしているようだ。
 b. 疲労のあまり脚はふらつき、背中は汗でぐっしょり。
 c. 右手は、右側にある洗濯物のどっかを持ちまして、体がふらつかないようにち
 ょいと腰を入れてね。
 d. ハアハア～と速い呼吸で、歩く足取りがふらついたりグッタリとして横になっ
 たりします。

「食べ物」と「ぱさ(ぱさ)」の組み合わせは古くなったパンや炊き方を間違えたごはんなどの乾燥状態を表す。そのような食べ物は一度乾燥してしまえば、もう柔らかさやみずみずしさを取り戻すことはない。この場合「する」が好まれることを表3が示している。一方、「髪」と「ぱさ(ぱさ)」の組み合わせは髪の毛の乾燥状態を表すが、そのような状態はヘアクリームなどを付ければ改善できる。すなわち、これは表面的で一時的な状態と考えられる。この場合「つく」が好まれていることを表4が示している。

- (12) a. このターキーサンド、パンもターキーもパサパサしていたの[...]。
 b. 妊娠中は、赤ちゃんに栄養を採られるから髪がパサついて纏まりにくくなるんですよ。

「べた(べた)」はものの粘り気を表すが、「関係」などの抽象概念が Theme の場合、すぐにそのような関係が途切れるとは考えられないため、それは継続的な状態といえる。この場合「する」が好まれている。一方、「髪」が Theme の場合、その粘り気は洗えばなくなる表面的で一時的な状態である。この場合「つく」が好まれている。「化粧品」の場合、それを付ける肌(や髪)の表面を前提とし、化粧品の肌への付け心地を表現している。もちろん肌から化粧品はすぐに取り除けるので、これも一時的な状態である。この場合「つく」が好まれている。

- (13) a. ベタベタした濃密な人間関係が嫌いだから[...]。
 c. 最近は梅雨でジメジメしているので、[髪が]べたつきやすいです。
 d. 潤ってベタかない化粧水でオススメのものがあれば教えてください。

ここまでで、主語が Theme の場合、擬態語が継続的な動きや状態を表しているときには「する」が、擬態語が瞬間的な動きや一時的な状態を表しているときには「つく」が好まれることが分かった。また、Theme の表面もしくは Theme が添付されるものの表面の状態を表す場合「つく」が好まれることが分かった。

4. Agent を主語に取る動詞

これより Agent を主語に取る場合の「する」「つく」動詞の振る舞いの違いを見ていく。表5は「する」「つく」動詞いずれかで Agent を主語に取ることが優勢な擬態語を、その頻度と共にまとめたものである。

表5 Agent を主語に取る「する」「つく」動詞の頻度

擬態語	接辞	主語の種類		
		Agent	Experiencer	Theme
ばた(ばた)	する	139	0	16
	つく	9	0	4
ぶら(ぶら)	する	167	0	16
	つく	99	0	0
ふら(ふら)	する	134	0	62
	つく	92	0	100
ごろ(ごろ)	する	160	0	98
	つく	2	0	3
いちゃ(いちゃ)	する	42	0	0
	つく	41	0	0
もた(もた)	する	77	0	5
	つく	39	0	18
うろ(うろ)	する	401	0	7
	つく	351	0	0
ぱく(ぱく)	する	6	0	0
	つく	31	0	0

表5から8つのAgentを主語に取る「する」動詞のうち、「ぱくぱくする」以外の7つが「つく」動詞より頻度が高いことが分かる。注目すべきは、これら7つの「する」動詞は全て身体全体を使った動きであるという点である。

- (14) a. レース当日の朝にバタバタしたくないので土曜は山中湖で宿泊。
 b. 本当なら久しぶりに心斎橋商店街をブラブラして買い物しようかと思ったけど休日やから人でごった返してるしな〜[...]。
 c. 今日は買い物がてら、真っ昼間に自転車で出かけてまして、近所の公園などをふらふらしておりました。
 d. 明日は1日中スウェットでゴロゴロしよー[。]
 e. 向ヶ丘遊園の喫茶店でウェイトレスといちゃいちゃしてやがった[。]
 f. 何をもたもたしているんですか。いくら他県の事件にしろ、警部らしくないじゃないですか[。]
 g. 昔はよく九州や関西方面を一人でウロウロしていました。

一方、Agentを主語に取る「ぱくぱくする」「ぱくつく」は例外的に後者の方が高頻度である。これらが先の7つの「する」「つく」動詞ペアと異なる点は、その動きが身体全体によるものではなく、身体部位、つまり口の動きであるということ、さらに「ぱくつく」については他動詞ということである（なお、「ぱくぱくする」の6件のうち、自動詞は4件、「口」を目的語にとる他動詞は2件）。

- (15) a. [魚が]底砂をぱくぱくしている様子也没有ありません。
 b. フォルナッティはそこで一呼吸いれ、ロールパンにバターをぬってぱくついた。

5. まとめと考察

本研究では「する」「つく」動詞の違いについて以下の2つの発見があった。

- I. 主語がThemeの場合、擬態語が継続的な動きや状態を表しているときには「する」が、擬態語が瞬間的な動きや一時的な状態を表しているときには「つく」が好まれる。また、Themeの表面もしくはThemeが添付されるものの表面の状態を表す場合に「つく」が好まれる。
 II. 主語がAgentの場合、擬態語が身体全体の動きを表す場合には「する」が、身体部位の動きを表す場合には「つく」が好まれる。

これらは、「つく」動詞は否定的なニュアンスを持つ単なる「する」動詞の代替ではないことを示している。

「する」動詞の「継続性」と「つく」動詞の「一時性」の対比は擬態語部分の形態に由来するとも考えられる。一般に日本語における2モーラ反復形の擬音語・擬態語は音や動きの繰り返しを表しているとされている。この対比が本研究の「する」動詞と「つく」動詞の実際の振る舞いの違いに現れたとも言える。

「つく」動詞が持つ「表面性」については自動詞「付く」や他動詞「突く」が語源的に大きく関わっていると考えられる。一方で「する」には「つく」が持つような一般動詞との関連性は見出しにくい（故に、「表面性」のような特徴を持たない）。

Agentを主語に取る場合の上記発見IIはThemeを主語に取る発見Iと関連付けることができる。本研究で最も大きく関わるAgentを主語に取る動詞の用法はActivity verbs的な用法である。Activity verbsの意味は一般化すれば「意志によってコントロールされる身体全体の継続的な運動」である。これに反復形の擬態語と意味的に軽い接辞「する」の組み合わせ

せ容易に符合することができる。一方、非反復形の擬態語と接辞「つく」が持つ意味は **Activity verbs** の「身体全体」「継続的」という意味と符合しない。そのため、8 つ中 7 つの **Agent** を取る「する」「つく」動詞ペアで前者の方が後者より頻度が高いという結果を生んだと考えられる。

最後に「ばくつく」が「ばくばくする」より高頻度だったことについて、「ばく(ばく)」は口の動きで先の **Activity verbs** の一般化の「身体全体」の部分に当てはまらない（そのため「ばくばくする」の頻度はあまり高くなかった）。一方で、「ばく(ばく)」で表される「食べる」という行為は「**Agent** がその口を食べ物の表面に突き動かす」と見ることができる。この意味は接辞「つく」が持つ「表面性」や一般動詞「付く」「突く」との関連と共存しうる。結果「ばくつく」が「ばくばくする」より高頻度になったと考えられる。

参考文献

Takehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, Lawrence Schourup (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*, 2 vols. Mouton de Gruyter.

田守育啓、ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペ：形態と意味』くろしお出版。

関連 URL

少納言 KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese). <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>